需品を運ぶ。一般住民は零。

2013 年 3 月 21 日、東大と海洋研究開発機構の合同チームが EEZ 内でレアアースを含む泥を採取し、希土類を含んでいることを確認した。

埋蔵量は国内消費量の数百年分以上という。海底下数 m の浅いところの泥で、採掘は容易と思われるが、水深 5700m 海底の泥を採取，分析の結果、世界最大級の高濃度なレアアースを含む鉱床であることを突き止めた。

中国の一般的な鉱床の濃度は 500 ～ 1000ppm であるのに対して，南鳥島沖の鉱床はその約 10 倍の 6600ppm（0.66 %）だと発表した。

但し、約 5700m の深海の海底にあり、更に海流と水圧を克服して採算ベースで採掘するには技術的な課題が多い。

この海流と水圧の問題が解決できれば，海底下 2 ～ 4m にある泥の層なのでこちらは容易に採掘できる。

レアアースは iPad、プラズマテレビ、レーザー，自動車エンジン用コンバーター等のハイテク機器製品や最新兵器に使われ，現在、全世界の 90 %が中国産で占められており、そのため戦略的見地から 2009 年、輸出制限に踏み切り、世界は大きな衝撃を受け、そのため価格も高騰した。

アメリカの磁性協会は「アメリカは静かな危機に瀕している」とコメントした。

日本に対しては対日全面禁止措置を執ったことはメディアでも大きく取り上げられているが、アメリカの反応はこの措置がアメリカにも波及する怖れがあるとしてアメリカ産のレアアース産業に補助金を出す、中国産のレアアースを頼りにするハイテク兵器の見直しを軍事産業に求めるなど動いていたが、我が国のレアアース発見の朗報が世界に発信された。

しかしレアアースは中国が世界産出量の 93 %を占め、最も希少といわれる高価な鉱物資源に関しては 99 %と言われている位レアアースに関しては恵まれた国だ。

その中国が国家戦略としてレアアースの輸出制限をすることはあり得ることで、世界もそれを予想していた。特に日本に対しては全面輸出停止の切り札をチラツカセ圧力を加えてきた。

我が国も対抗処置としてレアアースを使用しなくともよい製品開発に努力し、モーターその他の製品で可能にしたし、既製品の廃品からレアアースを回収する技術も開発した。　それに加えて今回の南鳥島沖の発見であるから，まさに朗報となった。更に言えば南鳥島沖ばかりではなく日本の EEZ 内には有望な海底鉱床が多くあることも判明した。

このことは中国政府にとってレアアースの輸出規制は国家戦略にはなり得ないことを悟らせたことが大きい。

3 月 30 日、モンゴル公式訪問中の阿部総理はモンゴル国内に豊富に存在する地下資源開発に日本技術と資本を投与することを示すモンゴル開発計画を締結した。

この中にはレアアースも含まれており，明らかに中国を意識した締結になる。